ゲストのへや

第二回 岸浪清史さん（映画監督）
えーがにしてみたい物語特集

小説や漫画を読んでいて、「ああ、これが映画になったらなぁ…」何て思うことはありませんか？ 私にはあります。（特に小説）

それはどうしてなんだろう。一つには、自分の愛した物語りに拘わりたいという欲求。

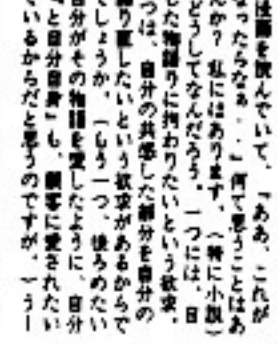
もう一つは、自分の共感した部分を自分の言葉で語り直したいという欲求があるからではないでしょうか。（もう一つ、後ろめたいけど、自分がその物語を愛したように、自分の映画『と自分自身』も、観客に愛されたいと願っているからだと思うのですが。）うーん…。

いきなり結論から始まってしまったような気がしますが、そんなこんなで私の映画化してみたい物語（小説、その他）特集です。

☽「F式蘭丸」［大島弓子］

いきなり大御所、大島弓子と言えば「綿の国星」がアニメ化されたり、「四月怪談」が小中和哉監督で映画化されたりしていますが、今度は佐野史郎主演で「毎日が日曜日」も映画になるとか。思い出すのは、以前山形フォーラムで「1999年の夏休み」と「四月怪談」の2本だてのとき、見に行くと、なんと小中監督がいらしていて、「次回作は？」という質問に、「F式蘭丸です。」とおっしゃると、会場にいた人達が「おおお！」っとどよめいたことです。自主映画をやってるひとは、どっかで大島弓子の洗礼を受けている人が多いらしくて、思うに、今から十二〜三年前に、「美少女映画ブーム」というものがあって、『自主8㎜映画と言えば美少女』という時代があったのですが、ちょうどそこに引っ掛かった人達にとってのバイブルだったからなのかも知れません。私も遡ればせな引っ掛かってます。（今もかもしれない。）

「今では顔が十五にもなり
その思いだし笑いの顔などを見ていますと
彼女にもすてきな人物が見えるのではないかと思ったりもするのです
一人のとき勇気づけられ
行きたい所に一緒に行き
何でも夢のままにしてくれる
・・・・でも
いつか自然にお別れしてしまうすてきな少年が。」



▲「F式蘭丸」より

これはラスト近くで語られる台詞。勘のいい人はこれだけで御推察と思ったテーマ、「どらえもん」だったり「ET」だったり、「ハクション大魔王」も「さびしんぼう」もそう。繰り返し語られて行く（これからも）べきテーマの一つの完成形がこの物語。

◀「赤すいか黄すいか」出演の山本裕子さん

▶「ナーバス・午前4時のルナティック」より

自分だったら8㎜フィルムで四十五分、泣かせるのは簡単。だから手が出せない。きっともう撮れない。誰か撮らないかな。この物語をベースにした自主映画が仙台で作られていたことを知ってる人はわりと少ない。1986年・東北学院大学製作、斎藤洋監督、「ナーバス・午前4時のルナティック」という作品がそれ。自主映画のビギナー必見。そういえば、「アンモナイトのささやきを聞いた」の山田勇男監督も「たそがれは逢魔の時間」にインスパイアされていると、インタビューの時いってたし、今関あきよし監督の「り・ぼ・ん」も、「パスカルの群れ」がベースだとしか思えないしなあ。大島ファン多いな。案外どこかでもう映画化されてるかも。もしあったらみてみたいな。

「車窓の旅」も…これは自分ではつくれそうもないので、TVでネオドラマかなんかでやって欲しい。身を守ろうとせずに、計算なしの少女の行動は、実はたくさんの原因と隠された計算があった訳で、（なんか、書いてて赤んなったなあ。自分。）こういうエッセンスってちょっと濃くすると「高校教師」になってしまう恐れがあるから（でも、あれは悪かだからいいんだと思っている今日この頃）難しい。現実離れしていながらも自然な映画になるしなあ。結局面白ければ結果オーライ…かな。なんか高飛車な勘違い野郎になってるな。反省。ながくなっちゃったけど、ついで。1981年、犬童一心監督が十六㎜で「赤すいか黄すいか」を映画化しています。こういうのって、どこに問い合わせれば観れるもんだろう？

▶「冷たい方程式」

☽「冷たい方程式」［トム・ゴドウィン作］

クラシックSF短編小説の古典。あまり優しくない宇宙。あまり豊かではない人類。人命にかかわるため絶対に守らなければならない航行規則。一人乗りの連絡船に隠れた密航者。許されない密航者。重量を超過しては目的地には到達出来ないため、密航者は捕らえられ、宇宙空間にほうり出される。（＝死）しかし、もしその密航者が何も知らない少女だったら？ 積み荷のワクチンが届かなければ、数十万人の患者が死ぬ。小さな宇宙船のコクピットのなかで、自分の運命を知らされる少女と、残された時間にせめて家族と話させてやろうとするパイロット。操縦席のセットさえ作ってしまえば、かなり面白いものが撮れるのではないでしょうか。キャストは少女とパイロット。（あと、モニターで出て来る何人かの人達）近付いて来る死の時間の恐怖に必死に耐える少女の姿が、とんでもなくけなげで悲しい。役者がやってるものを観たら不愉快になってしまうかもしれない。狭い空間の密室劇に近いものだから、「アップにしないと何が映っているのか分からない」と言われてしまう8㎜には、ぴったりなのかもしれません。人の覚悟と強さが最も問われる極限状況を正攻法で描写したいという選択をしたとき、けっこう救われずにすむ逃げ道かも知れません。特撮も最小限（使わなくても出来るし。クラシックSFにはそそるものが多いですよね。皆さんご存じのレイ・ブラッドベリ「太陽の黄金のりんご」に収録されてる。短編代表がこれなら長編代表が「アルジャーノンに花束を」（ダニエル・キース）なわけだけど、こっちのほうは「まごころを君に」のタイトルで映画化されてます。まだみてないけど。トム・ゴドウィンもダニエル・キースも「これ一作だけで喰ってる」とか言われてたのに、キースは結構書いてたって事、最近知ったのですが。ホイチョイでも言われてたけど「アルジャーノン」が2重人格、「五番目のサリー」が5重人格、3作目が二十四人格者の話っていうのは、ポリシーあっていいなあと思います。普通の（もしくは劣った）能力を努力以外の方法で拡大し、悲劇が起きるというのは、「アルジャーノン」以前からスタンダードではありましたが、これには僕は嫌になるほど出て来ました。（小さいころ読んだ子供向け雑誌『こどもの光』に載っていた創作物語を思い出します。）…と。

☽「飛鳥昔語り」［清原なつの］

既に古株になってしまった感じもありますが清原なつの。今を去ること十数年前（もうそんなになるのか！）中学生の文化祭でこの「飛鳥昔語り」を床屋さんにおいてあった「りぼん」で読んでから頭に血がのぼって、我が身の力量も顧みずに文化祭で上演してしまったのが運の尽き。日本の古代史も有間皇子の所だけ詳しくなってしまいました。もう内容を説明しようなんて気は全くないので、最寄りの本屋さんで、りぼんマスコットコミックを買い求めるように。（何様？）気違いのふりをしている皇子様というのはモチーフとしてよくあるし、有間皇子ネタって言うのは「クララ白書」から「ゴッドマーズ」（笑）」あるわけで、（信長はちょっと違うと思うけど）特に目新しいという訳ではないんだけど、清原なつのの良いところは、語り口が妙に冷め

G賞決勝進出作品御紹介

（グリーンリボン）

①サンタさんのおくりもの／東京都・田中佳織監督／パステル調でかわいらしいタッチの鯛子サンタの活躍をみんなの家族の歌にのせて描いたファンタジー・アニメ。②人間マスク／浜松市・新見文紀監督／強烈な残酷シーンが見物。これはアクションとは言わない。格闘だ。③意外な造形と変な顔と残酷を絶妙に押し込む正義が素晴らしい。④ウルトラセブン／上田を見てね。⑤[illegible]／東京都・安原伸監督／あちこちで何かと受賞していた「わたしの兄長およさん」の監督。あんな感じ。細かいギャグと大掛かりな元映とのコンビネーションが絶妙。⑥[illegible]3Dガンダム／千葉市・桜原守道監督／人間がモビルスーツになった実写版ガンダム。コマ撮りで水平移動する人の表情がおかしい。ちゃんと泣く。⑦日本の巨匠シリーズ 小津安二郎の「ゴジラ」／小平市・[illegible]監督／小津安二郎が「ゴジラ」を撮ったら。⑧アニメーションの作り方／伊賀市・[illegible]監督／笑えるんだけどちゃんとマニュアルにもなっているし優れもの。焼きいかゾンビは必見。⑨思い出のコペンハーゲン／東京都・なにわ天[illegible]監督／グランプリ受賞／思い出のコペンハーゲンをナレーターが淡々と語る。はじめに[illegible]を持たせるのがうまい。オチは言わないほうがいいので秘密だが、確かにグランプリです。

⑩納涼アニメ電球鳥賊祭／秘社・新谷尚之監督／昔のマンガの味わいを思わせるどこか奇妙でノスタルジックな世界。はじめのうちずっと鳴っている映写機のカタカタいう音が雰囲気を出している。全編アニメかと思いきや、実写でオチをつけているのがかえってマンガっぽくていい。⑪[illegible]／京都市・青木安美監督／琵琶湖に怪獣ビワラス出現。あぶない感じのお兄さん達が出演。「命蔵流刑退散する者」とかいうヘタクソなテーマソングもおかしい。自衛隊のような格好をして琵琶湖岸でロケの最中、本物の警官にみつかって捕まってしまう実録付き。

◆　◆　◆

えーと、実にいいかげんなことで申し訳ないのだが、グランプリ以外の受賞がどれがどれだか現在はっきりわかっていません。無責任な話なのですが、GR賞決勝大会現場で私はかなりのパニック状態に陥っており、肝心なところをよく記憶できなかったのでした。たぶん、④、⑤、⑦、⑨が金、銀、銅（2点）だったと思うのですが…。来月ちょこっとフォローします。すみませんでした。（情けなさすぎ）

サトウが勝手に惚れ込んだ作品
「仙台でも上映してくれ！」

（いやまあ私し。）

グリーンリボン賞のオールナイト上映会は良かった。司会の高柳弘さんのMCも良かったし、何よりフザケた映画（ホメてるんだよ）を山のように観ることができた。仙台でも夜明かし自主映画大会をやってくれないだろうか。ムリか。

仙台でもやってほしいといえば、オールナイト上映で観た「Genetic Takeover」という作品。私はフザケた映画にも幸福を感じるが、無機的な映像も待っている。そんな私が大オススメしてしまうのがこれ。実はファイブG賞（技術賞）を貰っている。監督は東京都の本多一鋭監督。

どんな映画かということを一番語りやすく簡潔に説明するなら、ヤン・シュワンクマイヤー監督系の映画となる。ヤン・シュワンクマイヤーを知らない人に説明すると、無機的な実写アニメーションとなる。以下、映画の中に出てきた要素とそれらから感じ取れることを幾つか並べてみる。

がらくたをかき集めて形作られたトリ、汚れて濁っぽい水道管、色合いは青緑系。いも虫が蛇のように動く赤い米、かたかた動くカブトガニ、ボルトとナット。目の中にわけ入ってゆくボルト。こんぺいとうとコルク栓のガラス嘴、集積回路。したたるしずく、きしむ音…

全体的に暗い雰囲気でよくまとまっており、観ていると少し長く感じてしまうが、観終わって少し経つと「ああ、もっと観てもいいや」と、思う。アニメーションとしての動きの表現は実に「無機的」で、血が通っているようには見えないのに、そこには確かに何かあるな、と感じるような動きである。現場に行くのはこわいけど、ちょっと覗いてみたい世界。

うだうだ説明するより、観れば一発なんだな。仙台で観る機会があるといいのだけれど。

ゲストのへやのつづきだ。

てるのに、言ってることが青いところ。これは、フィルムで過剰に叙情してしまうよりは、ビデオで、かつての「浮遊雲（注・主演／謡哲也）」のような雰囲気でやると良いのかな。本編はフィルムでエピローグだけビデオというのもいいかもしれない・・・。一時期、清原なつのの漫画を好んで舞台でやっているって言う人達を（あと、三原順とか、萩尾望都とか・・・）雑誌の情報欄とかで見掛けたけど、どこへ行ってしまったんだろう？（たいていは女のこ劇団だったけど。もうちゃんと一般人に更生しているのかな？・・・更生しい。）

▲「飛鳥昔語り」より

結局みんな、自分の作ってみたい映画になってしまった上に、年を感じさせられてしまうラインナップに自分でも情けなしとしてしまいましたが、誰に迷惑かける訳でなし、おおめにみて戴ければ幸いです。それでは、またいつか。失礼致しました。

スペースが空いたので
☛ 次回作に出る植物をつくってる岸浪氏。